分担研究報告

「自衛隊/軍事関連分野における国際知見 (NBC 関連) に関する研究」

研究分担者 木下 学 研究分担者 河野 修一

令和4年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「CBRNE テロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握及び国内体制強化に向けた研究」

分担研究報告書

「自衛隊/軍事関連分野における国際知見(NBC 関連)に関する研究」 木下 学

> (防衛医科大学校·免疫微生物学講座·教授) 河野修一

(自衛隊中央病院・診療科・診療庶務室長 兼 呼吸器科医長)

研究要旨

米軍軍事医学会(MHSRS; Military Health System Research Symposium)に参加し、CBRN 脅威に関する国際的な動向を調査した。COVID-19 パンデミック発生時のような未知なる病原体への迅速な医療対処策(MCM; medical countermeasure)が重要視されていた。mRNA ワクチンをはじめ、DNA ワクチンやウイルスベクターワクチンの開発に注目していた。また、米軍では、今回の COVID-19 パンデミックに対して、多くの医療機関が様々な医療対処を行っており、奥行きの深さが感じられた。最近の特徴ある傾向として、認知戦と複合させたCBRN テロ等の脅威が深刻化しており、これへの有効な対応策も急がれる。

A. 研究目的

CBRNE テロリズム等に係る健康危機管理体制の国際動向の把握を効果的に進めるために、2022年9月12日より4日間、フロリダ州キシミーで開催された米軍軍事医学会(MHSRS: Military Health System Research Symposium)に参加した。コロナ禍での中断を経て3年ぶりに開催された。本学会より得られた米国の最新のバイオテロをはじめとしたCBRN脅威の最新動向を報告する。

B. 研究方法

参加人数は 4,000 人程度と、コロナ禍で 2 年間中断したが、最近数年間で最多となった。企業ブースの展示も増えていた。露軍のウクライナ侵攻や台湾有事の脅威が増し、米国での国防・危機意識の高まりが背景にあるのか、学会は活況を呈していた。

C. 研究結果

COVID-19 によるパンデミックは、B 剤脅威

の最も深刻な典型例であった。COVID-19 ウイ ルスは、突如として中華人民共和国の武漢で 発生した全く未知のウイルスであった。由来 に関しては WHO による客観的な調査が行わ れていないため、全く不明である。致死性が 高く発症前から高い感染性を有する細菌やウ イルスは、容易にパンデミックを引き起こす。 遺伝子改変技術の進歩に伴い、このような病 原体の出現は現実的な脅威となった。この種 の生物剤脅威を念頭に、未知なる病原体に迅 速に対応できるワクチン開発のプラットフォ ームとして、mRNA ワクチンや DNA ワクチン の研究開発が米国防総省主導の下で莫大な資 金をかけて行われて来た。次なる B 剤脅威へ の有効な対処策 (MCM; medical countermeasure)を立てるには、過去から学こ とが重要である。

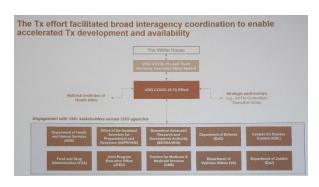
MHSRS 2022 でも、今回の COVID-19 パンデミックに米国が如何に対応したか、数多くの発表がなされた。学会初日には現在、Brooke 陸軍病院長の Teyhen 准将から米連邦政府の対応が次のように紹介された。

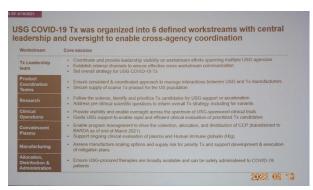
2020 年 5 月に operation warp speed (OWS)という対策が始まった。ウイルス自体を制御す



ると共に、感染からの合併症に対応する、2 正面作戦である。

国防総省や退役軍人局、CDC、FDA など関係する10省庁がホワイトハウスの下に協力した。そして、ホワイトハウスをトップに、タスクフォースがNIH と各専門家グループの助言の下、製造物の管理調整、研究、臨床対応、患





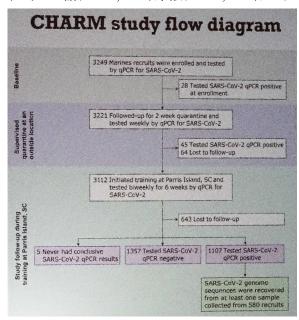
者血清採取、製造、普及の6つのチームを編成してオールアメリカで対応した。

とくに公衆衛生部門と民間医療部門の協調が 重要だった。Web 等での情報公開もしっかり としたが、これが重要であった。各州の知識 と能力を結集した。モノクローナル抗体の製造が得意な州、PCRが得意な州など(中央集権の日本とは基本的に違う)、各州で特徴があるそうだ。このような精力的な対応により、1年目に早くもモノクローナル抗体による治療が行われた。臨床での治験は軍が得意であり、これを迅速に行った。軍は感染症の国際的な情報収集も得意であり、これが迅速なワクチン製造に繋がった。FDAによる緊急承認も重要なポイントであった(EVA; emergency use authorization)。

続いて、COVID-19 パンデミックへの対応に 関して米軍の各医療施設からの発表があった。

1. Walter Reed 医療センター (CHARM study)

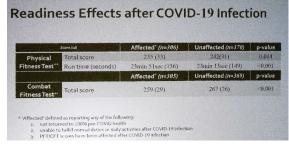
Walter Reed では CHARM study という prospective study を行った。海兵隊は罹患しても経過がしっかりと追えるので prospective study に適している。あらかじめ健康な新兵に PCR を施行して、そこから感染患者の発生を待った。3,249 名が登録し、1%が PCR 陽性であったが、うち 65.2%は無症状であった。最終的には陽性が 1,107 名、陰性が 1,375 名とな



った。ウイルスの変異によって症状の軽減が あった。詳しい解析は今後、行われるという。

この CHARM study には、COVID-19 感染後の後遺症、すなわち訓練等での運動能力へ与える影響も見ている。普通の訓練と戦闘訓練、中長距離走のタイムなど、いろんな運動能力を感染前後で調べていた。総じて感染自体は軽症であったようだが、パフォーマンスの低下は認められた。今後はワクチンの影響や免





疫能の変化も見ていく。後遺症 PASC に関してもみている。

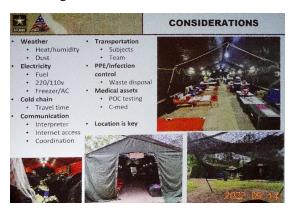
2. Wastewater サーベイランス

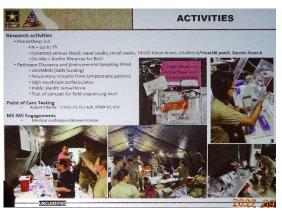
米空軍での COVID-19 感染症に関するサーベイランス。詳細な解析検討はこれから。このサーベイランスをサル痘でもやりたいとのこと。

3. ハワイ Tripler 陸軍病院 Prometheus

INDOPACOM ではインドネシアと共同訓練 Garuda Shield を毎年やっている。熱帯湿潤地域でのコロナ感染の特徴を調べている。 Prometheus 2.0 プロジェクト。訓練参加者のうち 75 人が感染した。感染者の血中コルチゾー

ル値はハワイに帰ってから上昇したが、Spike 蛋白の IgG はハワイへ帰ってきて低下した。

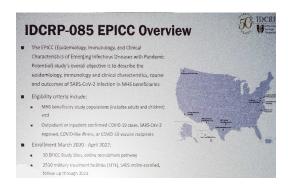




再感染の危険があるのか?ワクチンの影響など、詳しい検討は今後なされるらしい。

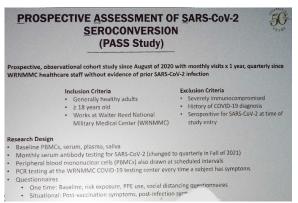
4. 米軍医大(USUHS) IDCRP

USUHS の感染症臨床プログラム(IDCRP; Infection Disease Clinical Research Program)の新興感染症に対する EPICC study (Epidemiology, Immunology, Clinical characteristics)の一環として COVID-19 を対象とした。2020.3~2022.4 の期間で感染者の症状とかを詳細に観察。不安や疲労、鬱のような後遺症が 6 か月も続く。咳は減るが関節痛は



増強し、これが3か月は続いた。非感染者の データがないのが問題か。今後はオミクロン 株やワクチンの効果を検討する。

USUHS とエモリー大免疫微生物学講座の研究として、PASS study (prospective assessment of SARS-Co-2 seroconversion)が行われた。Waler Reed 病院の勤務者を対象とした。mRNA ワクチンを接種した健常人の prospective study である。Microbead-based multiplex immunoassay (MMIA)を使っている。6か月で



抗体は減少していた。ワクチンはオミクロン 株にも有効だった。

特記すべきは、米軍では COVID-19 パンデミック下であっても、決して COVID-19 対策一色にならず、幅の広い厚い研究をしていた。新たな脅威となる可能性がある COVID-19 以外のウイルス病原体に対するワクチンの開発研究を、Walter Reed 医療センターと米陸軍感染症研究所(USAMRIID; US Army Medical Research Institute of Infectious Diseases)が中心となって行っていた。以下に紹介する。

1. Walter Reed 医療センター ジカワクチン

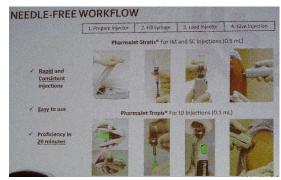
ジカは日本脳炎、黄熱と共に蚊が媒介する ウイルス感染症。やっと 1 年前からジカワク チンの第 1 相治験が始まった。2015 年にジカ が米国で見つかってから 5 年経っていた。ワ クチン開発のスピードが遅いのか早いのか分からないが、彼らは遅いと感じているようだ。 Lancet ではよく効いたと発表している (サルでの研究か?)。2回接種するが半年あけて2回目を打つ。日本脳炎、黄熱のワクチンとの相乗効果も期待される。T細胞の反応を見ていた。他にデングワクチンも開発中である。



全世界に展開する米軍にはこの種のワクチン が必須だ。

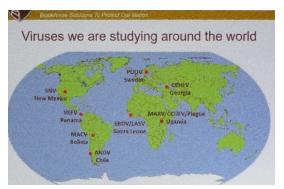
2. 米陸軍感染症研究所(USAMRIID)

針なしで打てる DNA ワクチンの開発。 Pharmajet という。筋注・皮下注と皮内注の 2 つのタイプがある。ベネズエラ馬脳炎 (VEEV) のワクチンとして、サルを使ってやっている。 サルへの VEEV の感染に関してはエアロゾルで肺から吸入させている。筋肉内へワクチン



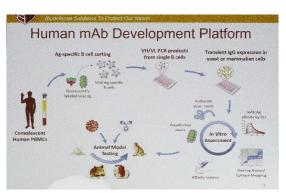
が入っていくが、なぜ針がなくてよいのか? 今後、臨床検討をやる予定らしい。

TREAT (Threat Reduction of Emerging pathogens/toxins using antibody therapeutics)プログラムというのを行っている。南北アメリ



カ、アフリカ、スウェーデン、ジョージアに 拠点がある。

出血熱ウイルスへのワクチン開発を念頭にしたプロジェクトであるが、ヒトモノクローナル抗体開発のプラットフォーム作りである。エボラウイルスの感染からの生還者8人のB細胞を取ってきて抗体を精製、中和活性を見ている。いろんな抗体から強い抗体を作り出





す Bi-specific mAb 戦略。非常に洗練された手 法を用いている。

D. 考察

MHSRS はコロナ禍の中断を経て、3年ぶりに開催された。今年は COVID-19 パンデミックに如何に米国が対応したかのレビュー的な要素が強かったが、他のウイルスや細菌感染へのワクチン開発もしっかりと行っていた。

しっかりとした見解には未だ至っていなかったが、ロシアや中国を対抗勢力と定め、認知戦を絡めた CBRN 脅威というものにも関心を払っていた。今後は、このテーマが重要になって来ると思われる。

E. 結論

米軍軍医学会に参加し、CBRN 脅威に関する国際的な動向を調査した。COVID-19パンデミックのような未知なる病原体への迅速な医療対処策(MCM)が重要視されていた。mRNA ワクチンをはじめ、DNA ワクチンやウイルスベクターワクチンの開発に注目していた。米軍では、COVID-19パンデミックに対して、多くの医療機関が様々な医療対処検討を行っていた。また、認知戦と複合させた CBRNテロ等の脅威が深刻化しており、これへの有効な対応策も急がれる。

F. 健康危険情報 なし。

- G. 研究発表
- 1. 論文発表
- 1. 報告書

MHSRS2022 報告書(防衛省、厚労省関係 機関に配布予定)

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得:なし。

2. 実用新案登録 : なし。

3. その他 : とくになし。